

幼な子の泣き声を聞け

[聖書]出エジプト記 1章 22～2章 10節

ファラオは全国民に命じた。「生まれた男の子は、一人残らずナイル川にほうり込め。女の子は皆、生かしておけ。」レビの家の出のある男が同じレビ人の娘をめぐらした。彼女は身ごもり、男の子を産んだが、その子がかわいかったのを見て、三か月の間隠しておいた。しかし、もはや隠しきれなくなったので、パピルスの籠を用意し、アスファルトとピッチで防水し、その中に男の子を入れ、ナイル河畔の葦の茂みの間に置いた。その子の姉が遠くに立って、どうなることかと様子を見てみると、そこへ、ファラオの王女が水浴びをしようと川に下りて来た。その間侍女たちは川岸を歩き来していた。王女は、葦の茂みの間に籠を見つけたので、仕え女をやって取って来させた。開けてみると赤ん坊がおり、しかも男の子で、泣いていた。王女はふびんに思い、「これは、きっと、ヘブライ人の子です」と言った。そのとき、その子の姉がファラオの王女に申し出た。「この子に乳を飲ませるヘブライ人の乳母を呼んで参りましょうか。」「そうしておくれ」と、王女が頼んだので、娘は早速その子の母を連れて来た。王女が、「この子を連れて行って、わたしに代わって乳を飲ませておやり。手当てはわたしが出しますから」と言ったので、母親はその子を引き取って乳を飲ませ、その子が大きくなると、王女のもとへ連れて行った。その子はこうして、王女の子となった。王女は彼をモーセと名付けて言った。「水の中からわたしが引き上げた(マーシャー)のですから。」

[1] 8月は、神様に立ち返る月—戦後75年を迎えて

今年は戦後75年を迎えています。そして今日は8/15の前の日曜日として、「平和主日」の礼拝を捧げています。今月は礼拝の中でバプテスト連盟の「平和宣言」をご一緒に唱和しますが、その内容は出エジプト記の「十戒」をパラフレーズしたものですよね。私たちが神様と人の前で誠実に生きるとはどういうことなのか。またその神様の前に立った時、この社会だけではなく、「自分の内側」を探られるということにもなりますね。けれど、それは自虐的になるということではないと思います。むしろ私たちが健全な者にしてくれるのではないのでしょうか。

キリスト教会はよく「悔い改める」という言葉を使いますが、これは単に「反省する」ということよりも、「立ち返る」という意味がある言葉です。私たちが元々いた所に“立ち戻る”のですよね。ですからそれは難しいことではなく、ある意味とても自然なことなのだと思います。聖書は旧約聖書の時代からしばし

ば、「わたしに立ち返れ」、「人の子よ、帰れ」と呼びかけています。

[2] 「命」の物語—助産師たちの行動

聖書は「平和」に対する思想を語っているとよく言われますし、間違っていないと思います。けれども、私は思うのですけれども、私たちは「戦争」とか「平和」という事柄を、頭でっかちになって考え易い所があるのではなかと思います。つまり、それを国のレベルの問題にしたり、逆に、地に足がつかない頭の中の議論（理想論）にしてしまうことがあるのではないのでしょうか。確かに「平和」とは、目に見えないもの、とも言えると思います。「平和的な状況」というものは目で見る事が出来ますけれども「平和そのもの」は、もっと深いものでしょう。けれど、それは「命」が目に見えないのと同じだと思います。「あなたの命」は、外身では絶対に表せないものではないでしょうか？ それは深い意味で隠されているのです。

今日私たちに与えられた箇所は、「出エジプト記」の1章から2章にかけてです。あのユダヤの民を率いた「モーセ」誕生の物語です。この箇所と「平和主日」とどんな繋がりがあるのか、私も正直どう語ったら良いのか戸惑ったのですけれども、改めてここを読んで、神様が新しく教えて下さったように思うのです。ここには、時代を超えた「命の物語」があるのではないかと思います。

当時、エジプトの国で奴隷状態になり酷使されていたユダヤ人たちです。長年苦しんでいたその彼らは、やがてモーセによって、ここから脱出するのです。正に「出エジプト」ですね。モーセは決してスーパーマンではありません。その重荷に潰されそうになったことも、弱い部分も持ち合わせていました。しかし、そのモーセを支える者たちもいて、あの葦の海を奇跡的に渡って、一民族の解放劇の先頭に立ったのがモーセです。そのモーセは、産まれた時もなかなか大変だったということが分かります。実は二度、誕生の際大きなピンチがあったのです。

その一つは、今日読んで頂いた直前のことですが、助産師たちの存在もモーセの誕生に関わりがあったと言えます。エジプト王ファラオは、ユダヤ人らが国の中で増え、力をつけて来たので、こともあろうに、産まれてくる男子を殺せという勅令を出したのです。ところが、助産師たちは神様を畏れていたのです、ユーモアを持って、王に対してこう語ったと言うのです。18節からお読みします。—「エジプト王は彼女たちを呼びつけて問いただした。「どうしてこのようなことをしたのだ。お前たちは男の子を生かしているのではないか。」助産婦はファラオに答えた。「ヘブライ人の女はエジプト人の女性とは違います。彼女たちは丈夫で、助産婦が行く前に産んでしまうのです。」—これで、男の子たちも殺されずに済んだのです。

なぜこのようなことが言えたのでしょうか？ 一つは、同じ思いを持つ仲間がいたので勇気づけられたということもあるでしょう。けれども、これは絶対権力を持つ王への反逆です。自分たちだって危ないのです。しかし、そんなことを微塵も感じさせないたくましさです。17節には「助産婦はいずれも神を畏れていた」とあります。彼女たちにとって、「神を畏れる」ということと、「命を殺さない」ということとは一つだったということです。それを彼女たちは、押し付けではなく自分の頭で考えたのです。「平和」とは、その意味で「考え、作る」ものなのですね。

戦争の時必ず使われる言葉は「敵」という言葉ですね。けれども「敵」という言葉は、「この人が敵、この国が敵」と刷り込まれてしまっていることがとても多いのです。前にも紹介したことがある谷川俊太郎さんと Noritake さんの絵本『へいわとせんそう』の中で、「てきのあかちゃん」と「みかたのあかちゃん」の絵は違う所が全くない赤ちゃんとして書かれていました。「敵」も「味方」も、“作られたもの”なのです。産まれて来た環境が違うだけで「敵」や「味方」が出来てしまうのは間違いなのです。神様は、創世記の最初で人間も含めて全被造物を創造された後、それをご覧になって「それは極めて良かった」（創1:31）と満足されたとあります。神様が全ての「命」を祝福されている、ということに他なりません。

モーセ誕生の際の、危機からの救いのもう一つが今日の箇所です。生まれて来たのは良かったものの、モーセの母親は隠し切れません。そこで、一縷の望みをかけて、その子をパピルスで作った籠に入れ、ナイル川の葦の茂みに隠したというのです。産まれて三か月の赤ちゃんをです。そうしましたら、その川にエジプト王女や侍女たちが水浴びにやってきて、その籠を発見しました。王女が籠を開けると、そこには赤ちゃんが守られて入っていた。「開けてみると赤ん坊がおり、しかも男の子で、泣いていた。王女はふびんに思い、「これは、きっと、ヘブライ人の子です」と言った」（5～6節）。この部分の描写が私はとても好きです。ここから物語は展開していき、何とモーセは殺されるどころか、母親のもとで生活することを許され、そして大人になると、エジプト王女の子供として迎えられるのです。

この王女は、自分のエジプト王の命令より大きいものに心を動かされたのだと言えます。「開けてみると赤ん坊がおり、しかも男の子で、泣いていた。王女はふびんに思い…」とありました。赤ちゃんの泣き声に、彼女は「命」の叫びを聞いたのだと思います。私も、何度かお話ししましたが、5月に、初めての孫（女の子）が与えられました。時々行って抱っこさせてもらおうと、結構泣かれるんです。ちょっと悔しい。嫌われてるかな？とも思ってしまっているのですが、赤ちゃんは泣くこと

が表現の全てですね。言葉以上のものです。言葉の根源と言ったら良いのか、「命」が声になっているということを感じるのです。鈍感な私でもそうですから、女性はもっと深い、通じ合うようなものを感じ取るのではないのでしょうか？「男子は泣いていた。王女はふびんに思い」とありました。これです。「命の泣き声」を聞き取り、心を動かすその感性が人間にはあるのです！私はこの出会いこそ、人間に与えられる最も深い出会いの一つなのではないかと思いました。

あの主イエス・キリストも、産まれた時は、自分の知らない中で人間に助けられながら、布に包められて家畜小屋で生まれました。真に弱い存在としてこの地上に来られたのです。神の大冒険です。でもそれは、人間を本当に愛しているからでしょう。人を慈しむ、ということは、神様の愛のわざと深く繋がっています。

[3] 祈る被爆者の姿に

8/6の夜NHKのTVで、「証言と映像でつづる原爆投下・全記録」という番組を見ました。その中で、私がとても心を打たれた場面のお話をします。当時の医学生が原爆直後の長崎の被爆者を診ていました。浦上天主堂が建つ、カトリック教徒の多い場所に原爆は落とされたのです(今日は丁度8/9ですね)。彼らの多くは、大変な状態の中で、夕べになると皆で祈りを捧げていました。その時、その医学生濱清さんは、なぜこのような仕打ちを許す神に祈るだろう？と怪訝に思ったと言うのですが、後になってこう思ったと証言されます。「あの祈りは、原爆を作り、落とされた人たちも含めて、人間が犯した罪に対する謝罪の祈りだったんじゃないか。私はすべてを失った人間の最後の尊厳を見たように思った」と。

戦争とは人を醜くするものです。そこには差別があります。それを生み出すのは残念ながら人間の心です。けれどもその人間を原点に立ち戻らせてくれるものが二つある。一つは赤ちゃんの泣き声です。命の叫びです。そしてもう一つは、神様の赦しです。キリストは私たち人間のために十字架上で何と祈られたのでしょうか？—「父よ、彼らをお赦しください。自分が何をしているのか知らないのです」(ルカ23:34)これが、決定的です！「平和」とは空想や理想ではなく、この神様が打ち立てて下さった「赦し」という土台の上に築いていくもの。いつもここから、私たちが共に生きる命の歩みを始めさせて頂きたいと思います。お祈り致します。

主よ、あなたは私たちを互いに愛し合うためにお造り下さいました。その限らない愛にもう一度立ち戻らせて下さい。戦争はただ人間とこの世界を破壊することですが、あなたの愛は私たちを赦し、この世界を新しくして下さいます。私たちをも新たにして下さい。主イエス・キリストによって祈ります。アーメン。